

文学—科学—道徳

——戸坂潤における「認識」をめぐる

Literature-Science-Moral

—“Cognition” in the thought of Tosaka Jun

太 田 信 二
Shinji OHTA

はじめに

戸坂潤を特徴づけることばの一つとして、「エンサイクロペディスト」ということばを挙げることができるであろう⁽¹⁾。

『思想としての文学』の「序」での次のような戸坂の発言は、この特徴づけを裏づける典型的な事例といえよう。この『思想としての文学』は、京都大学の哲学科の卒業論文のテーマが〈空間論〉であった戸坂にしてみればいわば当然の流れともいえる著作『科学論』（1935年）に続いて、新聞や雑誌に載せていた論文をまとめ、1936年に出版したものであるが、この点も念頭において見てみることにしよう。

「私が到達せねばならぬと考えていた観念に、科学論の領域ではとも角も辛うじて一応到達できたと思うが、文学の領域ではまだ私はそこまで進んでいないと云った方が本当だろう。この課題の唯物論的な解決は私流には之からだ。併しそのための踏み台としてはこの本は多少の意味ある示唆を含んでいると思っている。特に文学と道徳との関係、道徳というものの新しい意義、そして之らのものと科学との連関などの分析に就いては、私は今後に向かって相当の希望を有っているのである」（『思想としての文学』序、全集第4巻、3ページ）。

見られるように、戸坂はここで科学、文学、道徳といったさまざまな対象について論ずる必要性に言及している。戸坂は、もちろん、これらにとどまらず、さらに風俗論、映画の問題、イデオロギー論……といったように、まさにエンサイクロペディストとして多様な領域に関心を示しているが、同時にここで注目したいのは、そうした関心の多様性ということだけでなく、それらの必然的関係ということも念頭におかれているという点である。つまり、たんにさまざまな事柄にたいして、いわば並列的に関心を抱いたというのではなく、明らかにしなければならないと考えたのは、上の引用で明確に語られているように、たとえば

「文学と道德との関係」であり、文学や道德と「科学との連関」なのである⁽²⁾。

さらに、その場合、『思想としての文学』に収録されている「モラリストの立場による科学と文学」という論文の冒頭部分での発言に注意してみよう。戸坂は次のようにいっている。

「私は科学を一纏めに評論したならば（これは大変な仕事でいつ本当に出来るか判らぬが）⁽³⁾、その次には『科学と文学』との関係を批判すべきだと思いついた。単に二つが並べられる習慣になっているからではなく、ここには論理的または認識論的な、新しい問題が横たわっていると思うからである」（「モラリストの立場による科学と文学」, 26ページ。なお、以後、この論文は「モラリストの……」と表記する）。

ここで「科学を一纏めに評論したならば」という発言を、この論文の冒頭での発言「私は、科学（或いは広く学問と言ってもいいが）を一纏めにそれ自体として見れば、どういうものだろうか、という観点から、一つの小さな本を書いた（『科学論』）」（同上、25ページ）と重ね合わせて読めば、戸坂は『科学論』を執筆するなかで、科学と文学との関係について明らかにすべきだという課題に思い至ったということになるであろう。しかもそれは戸坂にとって、同時に「論理的または認識論的な、新しい問題が横たわっている」からだというのである。

こうした戸坂の指摘に、われわれはある種の新鮮さを感じるといっていいであろう。しかし、同時にこうした一連の戸坂の指摘にわかりにくさも感じざるをえないのである。たしかに、戸坂は多様な問題にたいして、エンサイクロペディスト的関心を抱くと同時に、その関心は、既述したように文学、科学、道德についての並列的な関心ではなく、それらの間のなんらかの連関も明らかにしようとするものであったが、しかし、科学と文学との連関といわれ、さらにはそれらと道德との関係といわれても、有り体にいって、それらの関係については明確なイメージをただちにもつことはできないといわざるをえないであろう。まして「文学は科学の必然的な延長だとさえ言っている」（「モラリストの……」, 31ページ）といわれ、「科学者はしかしどういう立場に立てば科学を文学にまで推し進めることが出来るか。つまり科学的概念を文学的表象にまでモーラライズ出来るか」（同上、32ページ）といった課題を提示されると、むしろ困惑を覚えると言えいわざるをえないのではないであろうか。

もちろん、〈科学の必然的な延長としての文学〉ということによって、戸坂は科学の成果をたとえば小説という媒体を使って表現すべきだといったことをいおうとしているのではない。あるいは、〈科学的概念のモーラライズ〉ということで、科学的概念を道德命題として表現し直すべきであるといったおよそ非現実的な提起を行っているはずはないのである。同じことが文学と道德の間にも成り立つことは明らかであろう。文学は道德でなければならない

い、といわれて即座に納得する者は、まずいないといっていいであろうからである。

しかし、戸坂の以上のような指摘は、たんに大方の同意はえられないような指摘にすぎないものなのであろうか。

この点にかんしては、むしろ、戸坂の用語法および叙述スタイルについてまずは考えてみる必要があるのではないであろうか。

前者にかんしていえば、哲学上の用語は「實際生活に基づくニュアンスを全く取り除い」たものであってはならないとし、哲学は、「超世間的で超常識的な用語を以てしては、決して科学的にはなれない」（『認識論とは何か』、353ページ）というのが戸坂の理解なのである。そうした理解にもとづいて「私は、凡ゆる常識的の用語を、『広範な意味において』理解することが、哲学の任務の一つだと考える。いや、これこそそもそも認識論なるものの実施の第一歩でもあるのだと言いたい」（同上、354ページ）とする戸坂の主張が出てくるわけであり、また本稿でのちに焦点をあてる「自分」や「自己一身上の問題」といった戸坂によって重要な意味を持たされているタームも登場するわけであるが、こうした主張、用語の使い方自体は、哲学の用語それ自体のことばとしてのわかりにくさが不評を買うといういまだに続く状況からしても、積極的に評価すべき面をもっていることはたしかであろう。しかし、たとえば山田洸氏が戸坂の中心概念にかんして、「文学的道徳観念というような言い方をしたことが適当であったか否かは後の問題として、……」、「……はたしてそれを『文学的観念』という風に名づけたことが正しかったのかどうか……」⁽⁴⁾といった付帶的指摘をしていることから知りうるように、戸坂の試みは、時として戸坂自身の意向に反して、いわば空回りをしてしまい、理解をかえって難しくしてしまう場合もあるのである。

それに劣らず、指摘しなければならないのは後者の問題である。つまり、戸坂の叙述が、上で紹介した科学と文学との関係についての発言にも見られるように、率直にいて、ラフスケッチ的な側面をもっている——もちろん、そこには、戦時下での困難な状況のなかで執筆活動が続けることを余儀なくされたという事情が影響しているのは間違いのないにしても——といわざるをえないのである⁽⁵⁾。しかし、それがラフスケッチ的であるからこそ、あるいは、あるにもかかわらず、表面的には、ないし一読したときには疑問なしとはしない表現・指摘からいろいろなことを汲み取りうるところに戸坂の魅力があるといっているであろう。いいかえれば、先の用語の問題を含めて、戸坂の指摘から、なにを読みとり、どのように膨らませるのか、なにを、そして、どのように引き継ぎ、発展させるのかは、読者であるわれわれに委ねられているといっているのではないであろうか。

こうした問題意識を持ちつつ、以下、上で触れた科学、文学、道徳等の連関についての戸坂の考えを、認識論的な問題関心から明らかにしていくことにしたい。

(I) 文学の科学との統一

さて、科学、文学、道徳といった一連のものの連関についての戸坂の主張を考えようとするとき、まずもって注意する必要があるのは、戸坂が認識を多様な活動を含むものと考えていることである。つまり、われわれは通常「認識」ということを、ただちに「理論的なもの」、「科学的なもの」のみに限定して理解しがちであるが、戸坂は「認識なるものそのものを、理論や科学ばかりでなく、芸術的創作と享受にも、道徳的意識と行動にも、通用させよう」（「認識論とは何か」、359ページ）とするのである。したがって、戸坂にいわせれば、「芸術的認識」や「道徳的認識」も、「科学的認識」と同様に、認識の一環として当然認められるべきものということになるわけである。

多様な活動が同時に認識活動でもあるという戸坂の理解の正当性は、たとえば「社会的認識のない処に、本当に道徳などはあり得ない」（同上、359、360ページ）という指摘を考え合わせれば同意できるであろう。同じように、「詩人は優れた認識の所有者であるに相違ない」（同上、359ページ）のである。その作品を読む人の心を打つことが出来るとすれば、それは、社会についての、そしてまた人間についての人の共感を呼ぶことができる、その詩人がもっている優れた認識に裏打ちされた作品であるということが出来るであろうからである。それらは、それぞれ独自性をもちつつ、現実の認識もしくは現実の問題の認識にもとづいたもの、したがってそれぞれが現実を認識する活動という要素を含んだものでなければならないのである。

だからこそまた、今、戸坂によって芸術的なもののいわば総称とされる「文学」⁽⁶⁾に絞っていえば、文学が使う《ことば》、つまりは「文学的表象」もまた、総体としていえば現実についての洞察にもとづいた、あるいは現実の認識を基盤とした、そして現実の反映にもとづいた、したがって「物質的検証を保証された理論的範疇を」文学のことばへと「翻訳」（「モラリストの……」、30ページ）したものということができるであろう。もちろんここでいわれる「理論的範疇」は、戸坂が「文学的表象」と対で使うことが多い「科学的概念」にほかならないことからすれば、文学的表象とは、それぞれ独自の形式によって翻訳された科学的概念であるというようにいいかえることもできよう。

いずれにしても、文学的表象が、科学的概念とは違って、どれほど自由であろうとも、あるいは「実在という岩に縛られているプロメテウス」ではなく、「解かれたプロメテウス」であろうと（「モラリストの……」、28ページ）、そして「文学は文学・道徳は道徳・映画は映画でそれぞれの独自の原則」あるいは独自の形式を「有っているにも拘わらず」（「認識論とは何か」、361ページ）、それらがおおよそ認識活動にもとづいた、そして認識活動の一環として存在しているかぎり、それらは理論的範疇なり科学的概念の翻訳であるという特徴を

持っているのである。

その意味では、戸坂にとって、認識は、多様な形態のなかで展開されるものとして、「決して理論的認識に限らず、科学的認識に限らない。まして科学的理論体系の認識には限らない」が、しかしそのことは「この認識なるものが理論という形を有った、科学の、また科学的理論体系の、認識には限らぬ、ということであって、認識が何らかの意味で、非理論的であっていいとか、非科学的であっていいとか言うのではない。また非体系的であっていいということにもならぬ。科学の認識という意味における科学的認識でないものといえども、依然として科学的認識でなければならぬ、ということを忘れてはならないのだ」（「認識論とは何か」、360ページ）ということになろう。

では、なぜ、戸坂は、認識を広義に解していこうとするのであろうか。この点についても、ここで考えてみよう。戸坂の認識概念そのものは、「認識は真理の獲得であり開拓であり実現である」（「認識論とはなにか」、366ページ）という、ある意味オーソドックスなものである。しかし、戸坂にいわせれば、「真理の獲得・開拓・実現のためには、認識は人間の全生活を以て機能しなければならぬ」ないのであり、「我々は認識をそういう人間の生涯の経験を一貫するスケールにおいてばかりでなく人類の歴史的経験を一貫するスケールにおいて、理解しなければならぬ」（同上）ないのである。

だからこそ、戸坂は「認識なるものそのものを、理論や科学ばかりでなく、芸術的創作と享受にも、道徳的意識と行動にも、通用させよう」とするのであり、「芸術的認識」や「道徳的認識」も、「科学的認識」と同様に、認識の一環として当然認められるべきものということになるわけである。文学も認識活動であるのと同じようにして、音楽も、絵画もともに認識活動なのであり、認識は、人類史というスケールにおいても、個人というスケールにおいても、全生活活動において機能し、すべての文化活動を貫くものなのである⁽⁷⁾。

かかるものとして、戸坂からすれば、多様な活動が認識活動であるだけではなく、十全な形で理解された認識は、多様な活動を含んでいなければならないのであり、さらにはそれらの共同作業のなかで推し進められるべきものなのである。もちろん、どちらの面から見たとしても、つまり、様々な認識活動として見たとしても、総体としての認識活動として見たとしても、認識は、現実から出発し、現実へと還帰するという構造をもっていることには変わりはないのである。そして、そのためには、総称的にいえば、「表象」は「概念」の「翻訳」でなければならないのである⁽⁸⁾。

「文学」に即していえば——しかし、上述のことからすれば、「文学」にかぎらず、その他の認識活動にかんしても同趣旨のことがいえるはずであるが——もちろん、こうした現実から現実へというプロセスは、「文学的表象」に自動的に組み込まれているわけではないこと

も当然のことであろう。認識を「真理の獲得であり開拓であり実現であ」ととらえ、さらにそうした課題は、多様な認識活動の統一的展開のなかで初めて可能であるという認識観に立つことによって初めて「文学的表象」は、こうしたプロセスをなすのであるということができよう。

こうした流れのなかで、戸坂が注意している「文学主義」（「モラリストの……」，30ページ）についても一言しておこう。

戸坂がいう「文学主義」とは、まさにこうしたプロセスから切り離された文学的表象がもたらす認識の一つの——もちろん、戸坂からすれば否定的に評価せざるをえない——あり方なのである。この「文学主義」とは、文学的表象が狭義の理論活動のなかで使われることにかかわって登場するものであるが、戸坂が問題にするのは文学主義が「科学的概念で分析する代わりに文学的表象で結論を出そうとしたり」，「文学的表象へ話を切りかえてしまったりする」（「批評における文学・道徳・及び科学」（以下「批評における……」と表記），36ページ）点なのである。文学的表象なり，文学的事実のわかりやすさや「文学的な美しさ」（同上）故に，支持されることがありえたとしても，戸坂からすれば，こうした「文学主義」は，「文学的表象を使^し喚^{そう}」（「モラリストの……」，30ページ）することによって，「文学的表象が独力で理論体系を打ち立てる」（同上，29ページ）ことにほかならず，哲学の世界でいえば「非科学的な形而上学」（同上）をもたらすことにもなるのである。

（II）科学の文学との統一

（II）-1 科学の文学との統一の必要性

今まで述べてきたように，文学あるいは文学的表象は，科学あるいは科学的概念の「翻訳」として存在しているとすれば，戸坂からすれば，その逆，つまり科学も文学と，科学的概念も文学的表象と統一的なものとして把握されなければならないのである。もちろん，以下の戸坂の文章を読むと，その統一は，たとえば科学的概念が，文学的表象によって補完されるといったレベルの要求ではないというべきであろう。むしろ次の引用のなかで戸坂が主張しているのは，科学的理論がその実を発揮するためには，文学的表象，文学的探求を経なければならないということなのである。

すなわち，戸坂は次のようにいう。「科学的探求は文学的探求にまで追いつめられねばならぬ。それが認識^しというものの意味だ。ここに初めて，文学的表象による示唆や想像や誇張や象徴が，科学的に必要となるのである」（「批評における……」，47，48ページ）

さらに，注目したいのは，なぜ「科学的探求は文学的探求にまで追いつめられねばならぬ」のかという問いにたいする答えとして，この引用のなかで「それが認識^しというものの意

味なのだ」(同上)といわれていることである。つまり、文字通りに理解すれば、科学にたいして、あるいは科学的概念にたいして、文学との統一、文学的表象との統一を促すものは、認識だということであろうし、認識は、たんに科学的探求で尽くされるものではなく、文学的探求にまで突き進まなければならないというのが戸坂の要求であるといっているであろう。あるいは今までのことばづかいとの一貫性にもとづいていいかえれば、戸坂の要求は、科学的概念の本来的な理解には文学的表象が必要不可欠なものである、ということになるであろうし、「認識」が本来的な認識として機能するためには、「科学」だけではなく、「文学」を動員しなければならないのであり、「科学的概念」ばかりではなく、「文学的表象」が必要不可欠なのである、というように理解することができよう。

しかし、この戸坂の要求の意味するところも必ずしもすんなりと同意できるものではないといえることができる。もちろん、その要求が意味するのは、すでに指摘しているように、たとえば、社会科学上のなんらかの理論を理解するのに、その理論の小説化や映画化が必要であるといった類のことではないであろう。とすれば、われわれに必要なのは、「認識」が本来的な認識として機能するためには、「科学的概念」ばかりではなく、「文学的表象」が必要不可欠なのである、とまとめる戸坂の主張の意味を、戸坂にとって認識が意味するものはいかなるものなのかということに戻りつつ考えてみることであろう。

(II)－2 文学的表象の特性

ここまでの叙述の要点をまとめれば、戸坂は、科学的探求が本来的な意味で認識といえるものになるためには、科学的探求が狭義の科学的探求の世界にとどまることなく、文学的探求へと突き進むこと、そしてそのためには文学的表象を駆使することが必要だといっているということになるであろう。つまり、認識が本来的な認識として機能するためには、科学的概念が文学的表象と統一されることが必要なのである、ということが戸坂の認識についての理解だということになろう。

では、ここでキーワードとなっている文学的表象とはどのような特徴を持っているのであろうか。この点で注目したいのは、戸坂が「文学的表象」を「物質的検証を保証された理論的範疇を、翻訳し、一身上のアスペクトによって主体化し、その意味において一種の直感的な具象性にまで高められて出来上がった処の」(「モラリストの……」, 30ページ) ものとしていることである。

この指摘は

- (1) 「文学的表象」とは、「物質的検証を保証された理論的範疇」を「翻訳」したものであり

(2) その際、「理論的範疇」は「一身上のアスペクトによって主体化」されており

(3) そうしたものとして「一種の直覚的な具象性にまで高められて出来上がった」ものである、というように整理できるであろうが、(1)については、すでに文学的表象の科学的概念との統一ということで取り上げたものにほかならないし、(3)の直覚的な具象性をめぐる特徴づけは(1)と(2)から導き出される結果についての指摘であることからすれば、当面の脈絡で肝心なのは、文学的表象とは、理論的範疇、科学的概念を「一身上のアスペクトによって主体化」したものとする(2)の特徴づけである。

この特徴づけにしたがえば、戸坂がいう文学的表象とは〈科学的概念が主体化されたもの〉であり、〈主体化された科学的概念〉であるということになる。そしてその際、〈一身上のアスペクト〉が関与するという構図になっているのである。したがって「文学的表象は、科学的範疇に一身上の（個人独自のまたは人間群共通の）ニュアンスをあたえたもの」（同上、29ページ）であり、そのことによって科学的範疇、科学的概念は主体化されるのであるということもできよう。

ところで、〈主体化〉とは、〈自らのものとして取り込むこと〉、〈わがものとする〉こと等々といえることができるであろうが⁹⁾、このように文学的表象を介して主体化された理論的範疇、科学的概念が表すものは、戸坂にしたがえば、「概念ではなくて文学的表象（文学的に主体化された観念）の世界」であるところの「文学的描写の世界」（同、27ページ）にほかならない。その上で、戸坂は次のようにつけ加えているのである。「それ【文学的表象……引用者補】が概念でないということは、この表象が実在の模写ではなくてかえって自己の表現だとも考えられる処によく出ている」（同上）。

ここで注意しなければならないのは、今までの戸坂の主張を一貫させようとするれば、「実在の模写ではなくて」という指摘は、たとえば〈単純な模写ではなく〉や〈たんなる模写のものではなく〉といった補注を付して読むべきであろうという点である。というのも、われわれの確認にしたがえば、文学的表象は単純に「実在という岩」への縛めを解かれているのではなく、科学的概念と統一されたものであり、科学的概念の「翻訳」という性格を持っているはずだったからである。

以上の補足が妥当なものであるとすれば、主体化によってもたらされる「文学的描写の世界」は、認識対象の機械的再現、再生にすぎないのではなく、認識対象をわがものとした、すなわち主体化したところの認識主体による「自己の表現」だということになるであろう。あわせて、「自己の表現」とは自分が表現するということであると同時に自己を表現するという二つの面をもっているものとして理解できるということについても指摘しておこう。

さて、戸坂によって、この「自己の表現」は「壁」という比喻を使って説明されている。

すなわち、「文学的表現＝文学的表象の場面」がこの「壁」なのである（「モーラリスト及び風俗評論」全集第4巻、31ページ）。自己一表現の場面、場であるこの壁は、文学的表象が現れ出る場面である以上、当然、「之に影を写すというのは、事物の科学的な関係、概念＝範疇による事物の機構がそのままここに現れるのではないということであり、科学的範疇によって概念的に把握された現物関係が、この壁によって文学的表象という影となって姿を写す」（同上）のである。

ここでも戸坂は、「科学的範疇によって概念的に把握された」事柄が「文学的表象」を介して表現されるというように、文学的表象と科学的概念の關係に注意を促すことを忘れてはいない。つまり戸坂にとって、「一切の事物は人生であろうと心理であろうと、飽くまで科学的範疇＝概念によって処理されねばなら」（同上）なのである。しかし、そのことは文学的表象を使った認識主体自身の〈自己一表現〉を否定することにはならないのである。同一の事態が、科学的概念にもとづいて概念的に把握されると同時に、その把握にもとづいて、自己一表現という形式を通して、戸坂に即していえば〈壁に写し出される〉のである。

（II）-3 自己一表現と「一身上の問題」

さて、「認識というものの意味」を貫徹するための「文学的表象」の意義を考えたとき、それがもつ《主体化》、《自己一表現》の論理がケルンとして存在しているというのが、ここまでのわれわれの確認事項であった。では、こうしたタームを通して見たとき、戸坂が求めるあるべき認識は、どのような特徴を持っていることになるであろうか。

まず自己一表現ということにかかわって強調されるべきなのは、自己一表現によって「壁」に写し出されるものが、たとえ、そのままではないにしても、「概念的に把握された現物関係」である以上、なんらか統一された認識内容、認識像だということである。つまり、壁に写し出される「文学的描写の世界」は、まさに世界といわれる以上、当然のことながら、原子論的な、機械論的な知識のたんなる集合ではないということであり、ヘーゲルのタームを使えば《多様の統一》として存在しているはずであるということである。

この統一性ということにかんしては、先に確認したように、理論的なものであれ、文学であれ、戸坂にとっては認識であることに変わりなく、そしておよそ認識というものが、真理の獲得、開拓、実現であったことも考え合わせることができであろう。というのも、真理、真実は、およそ真理、真実といわれうるかぎり、それは「断片的な真実や閉された真実」ではありえず、「自分自身の生きた連関」を有したものであり、その意味で、そこには「体系（システム）があり歴史（ヒストリー）がある」（『哲学の現代的意義』、475ページ）からである。真理、真実は、《多様の統一》として存在しているのであり、認識とは、そう

した客観的な多様の統一を、わがものとする活動なのである。

そして、客観的統一にもとづきつつ、認識におけるあるいは認識内容における統一性を保証するものはないかといえ、¹⁰「科学的範疇によって概念的に反映された現物関係が、この壁によって文学的表象という影となって姿を写す」自己—表現活動を営む〈認識主体〉としての「自己」であるといっているであろう。

ところで、この自己—表現の主体である「自己」とは、戸坂に固有の、また時として否定的に評価されてきた「自分」にほかならないであろうが¹⁰、この「自己」、「自分」というタームの真意を理解するためには、なによりも「個人」との明確な区別の上に立って、その意味するところを理解することが肝心である。

この個人と自分との区別にかんしてまず注意しなければならないのは、われわれは〈個人〉としては、社会を構成する存在であり、社会を社会たらしめている個人であり、社会的存在として個人であるということである。したがって、個人とは、戸坂がいうように「社会科学的概念」であるといっているであろう。あるいは、平林康之氏が適切に説明しているように「個人は個人として特殊性と同時に普遍性をもっている。—『個人』は他の『個人』といつてもおかえうる」¹¹のである。

それにたいして、私が個人であると同時に、「自分」でもあるという場合、先の平林氏のことばを続けていけば、「自分」が「個人」とは対照的に使われていることからすれば、「『何人も『自分の』自分を他人の自分と取り換えることは出来ない』のだ」¹²ということができよう。戸坂の「社会を特殊化せば個人になる。ここまでは明らかに社会科学の領域だ。しかしこの個人を如何に特殊化しても『自分』にはならぬ」（「道德の観念」、338ページ）というのも、同趣旨の発言として理解できるであろう。

ただ、その際注意しなければならないのは、「個人を如何に特殊化しても『自分』にはならぬ」とされ、したがって「社会科学的方法は個人の処で止まらざるを得ない。つまり一般に社会科学的概念は、……『自分』という事情をうまく科学的に問題にできないのである」（同上）といわれているからといって、「自分」なるものが、科学を超えた、概念的には把握できない、したがって「個人」とは別の、たとえば実存主義的な非合理的な「この私」といったことを意味する存在論的カテゴリーを指しているわけではないということである。戸坂によって「それ【自分……引用者補】は意識だ」（同上340ページ）¹³ともいわれるように、「自分」とは、むしろ認識論的カテゴリーとして理解すべきもののなのである。

さらに戸坂は、「自分」概念との絡みで、先に文学的表象の特徴の(2)で言及した「一身上」、「一身上の問題」という概念も導入してくる。戸坂が、「個人」とは異なるものとして「自分」概念を導入する意味は、まさにこの「一身上の問題」ということを考え合わせるこ

とによって明確になるといえよう。もっとも、ここでの「一身上の問題」とは、たとえば慣用句的に使われる「一身上の都合」なり「一身上の理由」といった表現の場合とは違い、「私事」を意味するのではない。なんらかの問題が、たんに客観的なそれとしてではなく、まさに自分の問題、自分にとっての問題となったものを、「一身上」なり「一身上の問題」ということばで戸坂は特徴づけようとするのである。戸坂のことばでいえば、「一身上の問題」と言っても決していわゆる私事などではない。私事とは社会との関係を見捨ててもよい処のもののことだ。ところが一身上の問題はかえって正に社会関係の個人への集積の強調であり拡大」（『道徳の観念』、344ページ）なのである。このように、「自分」という概念は、当該の問題を、自らに照らして、あるいは自らの問題としてとらえかえして問題にすることを可能にする概念であるといえよう。

こうした形で、「自分」が「個人」と区別され、さらに直面する問題が、当の自分にとっての問題としてとらえかえされたとき、問題はまさに「一身上の問題」となるのであるといえることができる、という流れはいわば自然な流れといっていいであろう。そして、このとき、問題は「一身上のアスペクト」にもとづいて、あるいは「一身上の……ニュアンス」を与えられて主體化されたものへと転化しているのである。くわえて、「自分」が「一身上の問題」と密接なつながりをもっているとするれば、それは道徳の問題とも繋がってくるが、この点については、後に触れることにして、ここではまずは認識がらみの論点を考えていくことにしよう。

さて、「自分」が、たとえば、たんなる社会問題を主體化して「一身上の問題」としてとらえかえすことを可能にするのだとすれば、この転化がなされる場、それはもちろん、この私の意識においてであるが、ここでもまたその意識は、意識一般ではありえないのは当然であろう。あるいは「何か身辺のアトモスフェアとか、特定内容から切り離された抽象された生活感情とかいうもの」（『道徳の観念』、332ページ）にすぎないものでもないであろう。ここで問題になる意識とは、まさに、社会に生きるこの私の生活を支える意識、あるいはそれにもとづいて「社会機構の中」での「生活」が行われる意識にほかならないであろうし、さまざまな問題を自らの問題としてとらえ返し、また引き受けることができる意識なのである。そして、これこそ戸坂が「生活意識」と呼ぶ意識のあり方（同上）であるといえるであろう。この「生活意識」は、認識の主體的担い手であり、さらには、認識が本来的には、先に引用したように「人間の全生活を以て機能しなければなら」ず、また「人類の歴史的経験を一貫するスケールにおいて、理解しなければなら」ない（『認識論とは何か』、336ページ）といったレベル・密度で考えられるべきであるとすれば、この「生活意識」は、「生産機構に発して産業や経済生活や政治活動を踏み分けて通ったところの、社会そのも

の「脱汗の粒々たる結晶としての生活意識」（『道德の観念』，332ページ）であるとさえいえるような、自らの全生活史そしてまた人類史を視野に入れつつ、真摯に生活と向きあう意識だといっていいであろう。

ところで、主体化された「一身上の問題」への問題のこの転化は、同時に「科学的概念」が「一身化され自分というものの身につ」（同上，345ページ）くことにほかならないであろうし、さらにその転化の場が生活意識という社会のなかでいわば具体的に日々の生活を送ることを可能にする意識であってみれば、そうした生活意識の中へ取り込まれた科学的概念が「感能化され感覚化される」（同上）のも、あるいは先の「文学的表象」の特徴について(3)として示したときの表現を用いれば、「一種の直覺的な具象性にまで高められ」ることになるのも当然だといっていいであろう。もっとも、ここでも、この感覚化なり、具象化は、たんに個々のものが、表象像として思い浮かべられ、具体的な形姿が与えられるということに尽きるものではないことは当然である。「自分」が直面し、まさに「自分の問題」としてとらえかえされた問題は、たとえば教育問題であれば、自分の生活に伴ってさまざまな彩りを帯びた、先の戸坂のことはをもってすれば、自分の生活の中に取り込まれることに伴って「感能化され感覚化」された教育問題として自分の生活意識の中に登場してくるものである以上、当然それは自己を取り巻くさまざまな問題と関連させられた《多様の統一》という特徴も併せ持っているはずだからである。

同時に、多様が統一されたとき、つまり全体化が行われるとき、機械的に要素的知が寄せ集められるのではなく、問題に即した、いわば《知の組み替え》が行われるということにもなるのは当然であろう。この点にかんしては、文学的表象が「自己—表現」とリンクしていたことを考え合わせることもできよう。というのも、表現がまさに自己表現として、当然、表現主体である自分が行う行為である以上、自己に独自の形態化が施されているはずであり、また自己に内化したものを、認識の目的等に即した形で外化する行為である以上、対象のいわば機械的再生ではないからである。要素的知識が、必要に応じて、変形され・組み替えられて表象化されるのである。

さらに、こうした《知の組み替え》ということは、文学的表象の世界が、〈意味の世界〉と関連づけられていることとかわっているといってもいいであろう。事実、戸坂は次のようにも指摘しているのである。「表現はいつも意味を言い表す、表現とは意味の表現だ」（『モラリストの……』，28ページ）。というのも、表現が自己表現であるとすれば、そこには当然自分にとっての問題という視点から、要素的知の組み替えと合わせて、一定の意味付与が行われているはずだからである。さらにその際、「科学的な範疇を、意味の世界との連絡を言い表し得るようなカテゴリーにまで、改造しなければなら」（『道德の観念』，343ページ）

ジ) ないとすれば、そこに必要になるのは、平林氏も強調するように⁽¹⁴⁾「空想力(想像力・構想力)とか象徴力とか誇張力とか、アクセント機能」といった、文学に必須のものとされる総称的には表象作用ということができるであろう。この点でもまた、われわれは、認識にとっての文学的表象が果たす役割を認めることができるであろう。

しかし、ここでも注意しなければならないのは、文学的表象による「翻訳」の場合と同様に、「空想力」等にもとづいて付与される「意味」は、「客観的実在について」見いだされ、「発見」(「モラリストの……」29ページ)される意味なのであるということである。

「機械」あるいは「労働用具としての機械」は、「冷血なデモン」なのであり、「物理的範疇としての重力は」、場合によっては「重圧の精」(同上)でありうるのである。そして、たしかに、ここでいう「デモン」や「重圧の精」は、文字通りの意味では決して実験的に検証可能なものではない。戸坂のことはをもってすれば、科学、科学的理論が「実験の世界に住する(社会科学においても或る一定の意味において)」とすれば、「文学的表象は意味の世界に住する、解釈の世界に住する」(「モラリストの……」, 28ページ)のである。が、しかし、それらは、まったくの想像の産物であるのでもない。「デモン」は、客観的実在としての労働用具がもつ、ある客観的性質の——したがってその意味内容は科学的に、ないし理論的に説明可能な性質の——特殊文学的表現にほかならないといえよう。平林氏が戸坂のことはを引用しつつまとめているように、「空想力」等の「機能によって、『物質的検証を保証された理論的範疇』は、『様々のニュアンスを得、一種のフレキシビリティを得て』、『一身上のアスペクトによって主体化』され」⁽¹⁵⁾たものにほかならないのである。

さて、ここまで、認識が本来的な認識となるためには、科学的概念が文学的表象と統一されなければならないという戸坂の理解の意味を考えてきたが、その際の要点となるものが文学の核心をなすものとしての、〈表現〉、〈自己—表現〉ということであった。まさに、こうした表現活動によって、直面している問題は、自己一身上の問題へと転化し、自分に即してとらえかえされるのである。それはまた、直面している問題を自分に即して意味づける活動であるといいかえることもできるであろうし、まさにそうした意味づけには自分に即しての、知の組み替えが必要不可欠なものになるともいえようし、こうした意味づけ、知の組み替えのなかで、当の問題は「一種の直覚的な具象性」をもって、自分にとっての《多様の統一》として立ち現れてくるのであるということもつけ加えることができよう。

文学、文学的表象との統一は、さまにこうした一連の特徴を認識に与えるのである。

(Ⅲ) 科学と文学とのモーラライズ

さて、先に「個人」とは異なった「自分」概念の導入が、さらに「一身上の問題」にもつ

らなっていくということを指摘したとき、道德の問題とも、それは繋がってくるということにも触れておいたが、最後にこの問題について、紙数の関係から取り急ぎ要点のみ確認しておこう。

「はじめに」で取り上げたように、たとえば〈科学的概念のモラライズ〉といった戸坂の指摘は、そのものとして見たとき、奇異に映らざるをえないといっていいであろう。ただ、今まで述べてきたように、真の認識であるためには、科学的探求が文学的探求と統一すべきであるとされ、そして「一身上の問題」という視点が、まさにこの統一の要として存在していたことを想起するとどうであろうか。

たしかに、「一身上の問題」は、今までは認識活動のなかで位置づけられていた概念である。しかし、認識活動のなかで、認識対象となっている問題が「一身上の問題」としてとらえかえされるとき、その「一身上の問題」とは、まさにこの私が生きていく上で抱え込む問題と考えることができるであろうし、そう考えれば「一身上の問題」は、容易に私の生き方の問題として、道德の問題であり、モラルの問題であるということにほかならないのではないであろうか。

もちろん、その場合、「自己一身上の問題」となりうる問題は、狭義の〈人生如何に生きべきか〉といったいかにも道德然とした問題に限られているわけではないのは当然である。さまざまな社会問題を当然含めて、いかなる問題であれ、まさにそれを当の私にとつての問題として、したがって「自己一身上の問題」としてとらえるかぎり、それは、その問題に即して、自分がどのように振舞うべきなのか、またその意味で、自分はその社会問題に直面して如何に生きていくのかという問題——まさにこれを道德的問題と呼ぶことになにも問題はないであろう——となっているのである。戸坂自身もいうように、「社会機構の内に生活する一人の個人が、単に個人であるだけでなく、正に『自分』だということによって」（『道德の観念』、344ページ）、社会問題は、世間一般で論じられている、あるいは比喩的にいえば、新聞やテレビで取り上げられているといった感覚で受けとられるようなたんなる社会問題にすぎないのでもなく、逆にまったくの私事であるのでもなく、まさに《一身上の問題》に転化しているのであり、そしてまた、道德の問題としてとらえられることにもなるのである。この意味で、小川晴久氏も指摘しているように、戸坂にとっての道德、モラルとは、「科学的認識をたえず一身化する行為＝過程⁽¹⁶⁾」なのである。戸坂自身のことばでいえば「……道德というものは、或る事物が自然としてもつ問題でもなく、社会としてもつ問題でもなくて、それが人間銘々の一身上の問題としてもつ問題のことなのである。ただしこの一身上の問題は社会や自然自身の問題と離れてはありえないと言うことがここで大切ではあるが」（『批評における……』、45、46ページ）。

以上のことが認められるとすれば、われわれは戸坂とともに、「今や、自分＝モラル＝文学は一続きの観念なのである」（『道徳の観念』、345ページ）ということができよう。というのも、今指摘したように、科学的概念の一身上化は、科学的概念が「モラライズされ道徳化されヒューマナイズされること」（同上）にほかならず、さらにこの一身上化は、科学的概念が文学的表象を介して主体化されること、戸坂のこの箇所での表現でいえば「科学的概念が文学的表象にまで拡大飛躍すること」によって行われるものだったからである。

このことを最後に確認して、科学と文学そして道徳の関係についての戸坂の問題提起をめぐった本稿の議論を閉じることにしたい。

〔註〕

※戸坂潤からの引用は、基本的には、尾関周二篇『戸坂潤 科学と文学の架橋』（京都哲学撰書、第10巻）燈影舎、2001年から行い、本文中に論文名とページ数を示すこととする。

また、同書に収録されていないものからの引用は、論文名等にあわせて、『戸坂潤全集』（勁草書房）の巻数とページ数を本文中に示す。なお、「認識論とは何か」と『道徳の観念』は、前者は山崎辰蔵との共著『認識論』のなかに、そして後者は岡邦雄との共著『道徳論』のなかに収録された、まとまった章立てにもとづく論文であることから、たとえば（『認識論とは何か』、360ページ）といった形式で引用箇所を示したが、論文集に収録されているが独立した論文という性格を持っているものについては、論文集名ではなく、それぞれの論文名を示した。

※以下、引用文中の「……」は引用者による省略箇所を示すことにする。

- (1) 山田洸氏も、戸坂にかんする著作のⅣ章「道徳・文学・風俗」で「エンサイクロペディストとしての戸坂」を冒頭の見出しとして使っている。山田洸『戸坂潤とその時代』花伝社、1990年、163ページ参照。
- (2) 『全集第3巻』の巻末に付された鶴田三千夫氏の「あとがき」のなかで紹介されている、伊藤書店版の『選集』の編者である本間唯一氏の「あとがき」での指摘、すなわち、『『認識論とは何か』と『道徳の観念』とは密接な連繋のあるもので、著者生前、この両者を一書に纏めて再検討したいという意図を漏らしたものである。認識論も、人間一身上の問題・主体性の問題にまで押し広げて考えなくてはいけないというのが、著者の晩年の考え方の在り方であった』という指摘も参考になろう（全集第3巻、516ページ）。
- (3) このカッコ内の表現は、『科学論』で一応の仕事はしたが、満足のいく形で論じきるのには、なおいっそうの検討が必要になろう、といった意味での指摘だと考えられよう。なお『科学論』は1935年10月に出版され、「モラリストの立場による科学と文学」は1935年11月に書かれたものである。
- (4) 山田、前掲書、171、178ページ。
- (5) たとえば、「科学的概念を文学的表象にまでモラライズ出来るか」という問題を提起した先の引用箇所に続く文章は「その立場がモラリストの立場なのである。モラリストとここで言うのはモンテーニュ型の多少懐疑的な身辺エッセイストのことではない。実在の認識を一身上のモラルに、そして逆に主体のモラルを客観的認識に、交易する態度のことだ。ここに科学的批評家の立場もあるのである。モラリスト（人によっては之を哲学者ともジャーナリストとも呼んでいるが）にして初めて、科学と文学とを正当に対比し得る」（『モラリストの……』、32

ページ)となっているが、この部分も、正確な理解のためには適切な補足がなされる必要がある叙述だといえよう。

- (6) 厳密には、以下に示すように、戸坂は、「文学」を芸術全般を貫くだけではなく、さらに広い意味で理解している。すなわち、戸坂によれば、「世間で文学と呼び慣らわしているものをよく見ると、必ずしも芸術の一様式である文芸のことばかりを意味しているのではない。」むしろ「世間で文学と呼び慣らわしている」ものは「文芸を浸潤し、更に広く他様式の芸術的表現全般を貫徹し、それだけでなく哲学ないし科学にまで連関せねばおかぬ処の、或る脈々たる生きた真理」のことであり、「勝義に於いて、思想と呼ばれているものに他ならない」(『思想としての文学』序、全集第4巻、3ページ)のである。
- (7) こうした理解は、認識というものにかんする戸坂におけるもう一つ大きな《思想—文化—認識》という統一的な把握と関係するものと思われるが、この点についての展開は別稿に譲ることとしたい。
- (8) なお、表象と密接に結びつく認識活動の一環としての「想像力」も、《自由》を本質的特質の一つとしてもちつつ、現実へと帰る、もちろん元の位置に戻るのではなく、発展的に帰るという構造をもつのではないかという私見については、拙稿「想像力の問題に寄せて」(仲本章夫編『認識・知識・意識——現代的到達点を探る——』創風社、1992年)で「円環構造」と名づけすでに論じたことがある。
- (9) <主体化>をこのように解することにかんしては、「芸術に於る思想の主体化」について戸坂は次のように指摘していることを参考にすることができであろう。「芸術に於る思想の主体化によって、思想は初めて終局的に感覚化され具体化され活きた形態与えらる。そのことによって芸術は芸術家の生活そのものの課題となり『自分の問題』となる」(「主体及び道徳」、全集第4巻、101ページ)。
- (10) 戸坂と活動をともにしてきた古在由重もメンバーの1人として参加した座談会のなかでも、この「自分」は、のちに問題とする「一身上の問題」を含めて否定的なニュアンスで語られている。「座談会 戸坂潤の人・思想・業績」『現代と思想』8号、青木書店、1972年、139、140ページ。
- (11) 平林康之『戸坂潤』東京大学出版会、1960年、229ページ。
- (12) 平林、同上箇所。
- (13) 戸坂が次のように指摘していることもあわせて参照されたい。「だが『自分』とは実は、……世界の説明原理(……)である或る物ではなくて、単に世界を見るものでありこれを写す(模写する)ものなのだ。『自分』は個人とは異なって交換することの出来る物ではない。自分とは自分一身だ。これは鏡面であって物ではない」(「道徳の観念」、338ページ)。
- (14) 平林、前掲書、231ページ参照。
- (15) 平林、同上箇所。
- (16) 小川晴久「戸坂潤と現代」『現代と思想』12号、青木書店、1973年、116ページ。